青森保健大雑誌　9(2), 123－130, 2008

〔研究ノート〕

インド少数民族にみるヒンドゥー化
－サンタル女性のサリーの着方の変化を基に－

千葉　たか子[1)]

Hinduisation of the Ethnic Minority in India with Special Reference to Santali Women

Takako Chiba[1)]

Abstract

This paper reports on cultural changes in the lifestyle of the Santal, one of the Indian ethnic minorities, who have been experiencing changes during the process of development, namely Hinduisation, with special reference to women's attire.

The Bengal population extended their habitat to the areas where the Santal lived, as development advanced. The Santal came under the strong influences of Bengal culture, as the Bengal population lived near to them. The Santal, who once enjoyed their simple life close to nature, have been exposed to modernisation and marketisation.

Many researchers have pointed out that the ethnic minorities have been changing their way of life due to Hinduisation, thus causing loss of their ethnic identities. Changes bring both good things and bad things. Some people are willing to accept changes while others are not. One of the fatal points of these changes is that the ethnic minorities regard their culture as inferior to that of the general population and take in the general population's culture as 'formal' or 'a good thing to follow.' It is high time to consider what the Santal should preserve as their culture to maintain their ethnic identity.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 9 (2) : 123－130, 2008)

キーワード：サリーの着方、サンタル女性、ヒンドゥー化

Key words : Way of waring saris, Santali women, Hinduisation

要旨

本稿は、インド国西ベンガル州に住む少数民族の一つであるサンタル民族の女性のサリーの着方をとりあげ、ヒンドゥー化を論じたものである。

異なる文化をもつ人々が相近接して暮らしている場合、上位の文化や生活規範を下位の人々が取り入れるという傾向はよくみられることである。本研究の対象であるサンタル民族も近隣のヒンドゥー人口の文化に大きな影響を受けている（ヒンドゥー化）。そのヒンドゥー化の一例として、国勢調査において宗教をヒンドゥー教と申告することは指摘されている通りである。他の例として、サンタル女性のサリーの着方がある。日常的には伝統的な着方をするものの、正式なあるいは改まった場に出る際には、ヒンドゥー女性の着方をする。ここにも、サンタル民族が、自民族の文化を「下位」に、ヒンドゥーの文化を「上位」に位置づけているという意識を認めることができる。

開発と発展の中で、多くの少数民族は生活の場（森林や原野などの自然）を失い、多数人口と近接して生活する中で、多数人口の下位に位置づけられていく。そして、下位の人口は上位の人口の文化を取り入れるようになり、やがて民族としての意識や誇りが失われていく

1）青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

ようになる。これは民族としてのアイデンティティーを失いつつある状況と捉えることができる。開発は、少数民族が暮らしていくことを困難にし、少数民族が少数民族としてのアイデンティティーを失っていく過程でもある。少数民族が、自分たちのアイデンティティーをどのように守っていくかは、サンタル民族のみならず、多くの少数民族にとっても大きな課題である。

はじめに

二つの異なった文化を持つ社会が近接して暮らせば、互いに互いの生活様式を知っていく。そして、文化や生活規範などを取り込んで行く。その際、二つの文化に上位・下位の構造がある場合[1]、下位の層が上位の層の文化や生活規範などを取り込もうとする志向は、逆の場合よりも強く働く。

開発、都市化、工業化、近代化の中で民族も複雑な変化の中に巻き込まれざるをえない。かつてはヒンドゥー社会[2]とある程度距離をおいて生活した少数民族も「ヒンドゥー社会に近接して住むようになると、ヒンドゥーの生活実態を知るようになり、ヒンドゥーの仕事を手伝ったり、ヒンドゥーの小作人になったりする。そして次第にヒンドゥーの考え方や儀礼が取り入れられる（中根 2002: 169）」。これがヒンドゥー化 (Hinduized)[3] である。

異なる文化をもつ人々が相近接して暮らしている場合、上位の文化や生活規範を下位の人々が取り入れるという傾向はよくみられることである。本研究の対象である西ベンガル州に住む少数民族の一つであるサンタル民族[4]も、多数集団であるベンガル人[5]の生活規範を取り入れているとされる。それはすなわちヒンドゥー化であり、サンタル民族のヒンドゥー化である。では、ヒンドゥー化はサンタル民族の生活のどのような部分に具体化・具現化されているのだろうか。

本稿では、サンタル民族の生活にみられるヒンドゥー化の現象の一つとして、女性のサリーの着方をとりあげ、検討してみたい。サンタル女性のサリーの着方には2通り確認されており、サンタルの人びとはいずれもが「伝統的な（traditional）な着方」だという。しかし、それらの着方は、ヒンドゥー女性の着方とは異なっているものの、いずれもヒンドゥー社会とのつながりを感じさせるものである。さらに、日常的には自分たちの伝統的な着方をする女性たちも、正式なあるいは改まった場に出る際には、ヒンドゥー女性の着方をする。ここに、サンタル民族の自民族の文化を「下位」に、ヒンドゥーの文化を「上位」に位置づけているという意識を認めることができるのではないだろうか。

開発と発展の中で、自民族の文化を保持していくことすなわち自分たちのアイデンティティーをどのように守っていくかは、サンタル民族のみならず、世界の多くの少数民族にとっても大きな課題となっている。本稿では、まずサンタル女性のサリーの着方を基に、このような課題について考察してみたい。

なお、本研究は、2001年から2008年までの間、20数回にわたるインドの西ベンガル州にあるサンタル民族が住む村、具体的には西ベンガルの州都コルカタの西北にあるビルブム県（Birbhum District）ボルプル市（Bolpur Municipality）の近郊にあるS-1村、およびコルカタの西北西方向に位置するバンクラ県（Bankura District）サルトラブロック（Saltora Bloc）サルトラ地区（Sub District）にあるM村とその隣のS-2村での観察や見聞、聞き取りを基にしている。1回あたりの訪問日数は毎回異なるが、4－10日である。サンタル民族の多くはベンガル語を理解するので聞き取りは、適宜、通訳[6]を介して日本語～ベンガル語、ベンガル語～サンタル語、英語～サンタル語で行っている。

1．サンタル民族のヒンドゥー化

サンタル民族は、かつてヒンドゥー社会に距離をおき、自給自足の生活を営んできた。彼らの居住地は森や林、山地などに近接しており、生活資源をそこから獲得していた。近隣の自然から得られない必需品は、交換市場で得てきた。その際も、市場へ自分の製品を持って行き必要な物資と交換するのではなく、仲買人が間に立った（Singh 1972: 174）。

独立後、政府主導で貧困層の開発が進められる中で、民族の社会とヒンドゥー社会の距離は縮まっていく。格差のある社会が近隣してある場合、下位の社会が上位の社会の規範を取り入れようとする力学（上昇志向）が働く。ヒンドゥー社会に近接して暮らす少数民族は、ヒンドゥー社会の文化を取り入れるようになっていく（ヒンドゥー化）ことが指摘されている（Maharatna 2005; Chacko 2005; Mukhopadhyay 2002; Verma 1990）。

では、サンタル民族は、ベンガル社会のどのような社会規範や文化・慣習を取り入れているのだろうか。一つの例として、宗教が挙げられている。インドで国勢調査が始まったのは1870年代からだが、当初、人々は宗教によって分類された。そして少数民族の宗教はアニミズムとしてまとめられ、ヒンドゥー人口とは区別された。Ghurye（1963）は、インドの少数民族の調査にあたり、少数民族であるものの宗教をヒンドゥーとするコミュニティがある事実を取り上げ、これらの人々は、自分の宗教をヒンドゥーと申請することにより、ヒンドゥー社会の中に位置づけられるようにしたのだろうと理解している[7]。その理由として、少数民族であるよりもヒンドゥー

社会に取り込まれた方が、社会ステータスが上にみられるからだろうと説明している(1963:8)。

サンタル民族にみられる上昇志向、すなわちヒンドゥー化が自分の宗教をヒンドゥー教と申告するところに現れているのが一つの事実であるならば、では他にどのような事実があるのだろうか。

2．サリーの着方[8]に見る「ヒンドゥー化」

サリーは、広く南アジアの女性たちが着ている民族衣装である。インドの東部、西ベンガル州の女性たちが着ているのもほとんどサリーである[9]。写真1に見られるようなヒンドゥー女性の着方、これを「ヒンドゥー女性の着方」とする（写真1を参照）。

出所：http://sundar.jp/（2008.01.22）
写真1　「ヒンドゥー女性の着方」

1）「サンタル女性の着方1」

少数民族であるサンタル民族の女性たちもサリーを着る。しかし、彼女たちの着方は、インドの主流人口であるヒンドゥーの女性の「ヒンドゥー女性の着方」とは異なる。

まず、バンクラ県のS-2村の女性たちのサリー姿を見てみよう（写真2）。一見して彼女たちの着方が「ヒンドゥー女性の着方」とは異なることがわかる。これを「サンタル女性の着方1」と呼ぶ。

この「サンタル女性の着方1」は「ヒンドゥー女性の着方」と同様に1枚の布を着る。最初に約半分を腰の周りに巻いてスカート部とするのは同じだが、その次からが異なる。布端（ボーダー）の色の異なる部分に注目すると分かりやすいのだが、布端が足元とひざ辺りと2段になっている。「ヒンドゥー女性の着方」の場合、約半分をスカートにし、残りは、「手（パッル）」として背中に垂らす。しかし、「サンタル女性の着方1」では、残りの半分は、プリーツを作らずにそのまま背中に回し、続いて身体の前方に持ってきて、もう一度腰に回す。背中に下がる部分を、身体の前に持って来るので前掛けのようになる。

写真2　サンタル女性の着方
：バンクラ県S-2村
2007年1月8日チャタジー公子氏撮影

2）「サンタル女性の着方2」

次に、ビルブム県のS-1村の女性たちを見る。この村の女性たちのサリーの着方は、「ヒンドゥー女性の着方」とも「サンタル女性の着方1」とも異なる（写真3）。この着方は、2枚の布を用いており、1枚は腰に巻いてスカートとし、もう1枚を上衣にしている。この着方を「サンタル女性の着方2」とする。

写真3　サンタル民族の女性の着方2
2005年3月17日筆者撮影、ビルブム県S-1村

この写真は、訪問した筆者を歓迎して伝統的な民族舞踊を披露してくれた際のものである。したがって、特別な場合の着方ではないのかという疑問が呈されるかも知れない。

かつて留学生として、ボルプルにある大学[10]でイ

ンド古典音楽を学んだという中村仁氏が開設しているWebの頁に、「サンタル民族の家族」として一枚の写真が公開されている。その写真に写っている二人の女性も、「サンタル女性の着方２」タイプの着方をしている。このWebにはその写真を撮影した日時や撮影場所についての記述がないが、中村氏が留学していた時期（1973-83年）から推測するとこの時期のものと考えて良さそうだ。ここから、２枚の布を用いる「サンタル女性の着方２」は決して民族舞踊のための特別な着方ではなく、日常的に着ている着方といえるだろう。

３）研究者による観察

ここで、研究者によるサンタル民族を観察した報告をみてみよう。

Singh (1994) は、サンタル女性のサリーの着方について、「この共同体は服装が特徴的である・・・（中略）サリーか２枚の布を重ねて着る」と記述している（1994: 1043）。つまり、「サンタル女性の着方２」である。

また、Mukhopadhyay（2002:136）の報告は、「サンタル女性の着方２」を支持している。ただ、Mukhopadhyayは、サンタル女性の着方は地域によっても異なること、ヒンドゥー社会に近隣して生活する場合は、ヒンドゥーのような着方をしているとも補足している。

同様に、Kumar(2000:3116) の編集による *Encyclopeadia* では、「サンタル女性は１枚のサリー、あるいは２枚の布を着る」としている。

以上のように、研究者の報告も、サンタル女性の着方には、「サンタル女性の着方１」と「サンタル女性の着方２」の２通りがあることを述べている。では、「サンタル女性の着方１」と「サンタル女性の着方２」のいずれもが「伝統的な着方」ということになるのだろうか。

４）「サンタル女性の着方１」

前節で、サンタル女性の着方には、「サンタル女性の着方１」と「サンタル女性の着方２」の２通りがあることを確認した。では、「サンタル女性の着方１」と「サンタル女性の着方２」のどちらが、本来の着方、あるいは伝統的な着方なのであろうか。

民話は、時間の経過とともに脚色が加えられることも多く、「事実」とみることはできない。また、サンタル民族のように標記をもたない民族の場合、口承で伝えられるので「事実」からは遠く離れがちである。しかし、「民族にとっての事実」を伝えるものとして読めば、民話は多くのことを語ってくれる。本稿の場合のように、民族の服装に関する情報源としては頼ることができるのではないかと考えられる。

Bose(2002) がサンタル民族の民話をまとめた子ども用の雑誌、『*The Santhals*』がある。そこに載せられた挿し絵の一つを取り上げよう（図１参照）。これはサンタル女性がダンスを踊っている絵である。民話の挿し絵であるのでこの絵は「ずっと昔」を示していると見て良いだろう。

図１　ダンスを踊るサンタル女性
出所：Bose, N.(2002)、p.iv

この絵の中に見られるサンタル女性のサリーの着方は、以下のような特徴がある。

①着方はどちらかと言えば、「サンタル女性の着方１」に近い。
②サリーの色は白である。
③丈は短く着る。

これらの特徴の一つ一つについて、現在の２通りの着方や「ヒンドゥー女性の着方」と比較対照させながら検討してみよう。

①着方はどちらかと言えば、「サンタル女性の着方１」に近い。

この図１でみる限り、身体に巻き付けている布は１枚で、「サンタル女性の着方１」のようである。「サンタル女性の着方２」は布を２枚用いるので、スカート部分と掛け布風になる部分との２部式になる。明らかに「サンタル女性の着方２」ではない。ここから、「サンタル女性の着方１」の方が「サンタル女性の着方２」より古い着方と見ることができるのではないだろうか。

②サリーの色は白である。

民話に描かれているサンタル女性のサリーは白である。染色技術が発達していなかった時代には当然白い布を着るしかない。しかし、染色技術はかなり古い時期より始まっていることが通文化的にみられる。

Janah (2003) は、インドの少数民族の撮影を専門にしている写真家である。彼の写真集に納められたサンタル

民族の写真を紹介する（写真4）。これは、お祭りの際に行われたパフォーマンスを見物している女性たちの写真である。ここに写っている女性たちが着ているサリーは、白い物も色物もあり、様々であるのがわかる。撮影した場所や撮影日時についての記録が残されていないのが残念であるが、写真に添えられた寄せ書きによると、彼がサンタルの村で撮影したのは1946年から1967年の20年間（Janah,J.S. 2003:25）である。したがってこの写真が撮影されたのもこの期間だとみていいだろう。

ヒンドゥー女性の場合、白いサリーは未亡人が着るものである（西岡 1998:53）。未亡人は夫を失った存在としてあらゆる装飾を退けることが求められている[11]。近年は、未亡人でもボーダーに色が付いたものを着たりするが、基本はやはり白である。サンタル女性が、白いサリーも色物のサリーも区別・忌避なく着ていた様子がうかがわれる。

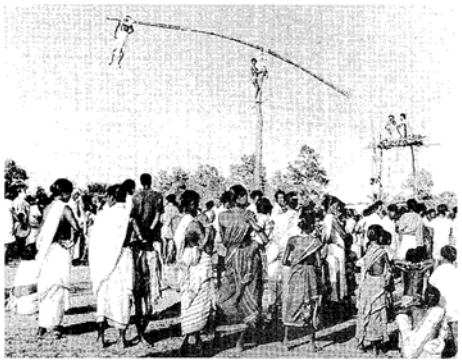

写真4　サンタル女性
出所：Janah,J. (2003:31)

③丈を短く着る。

「ヒンドゥー女性の着方」では、スカートのすそは地面ぎりぎりの長さで着る。短めに着るのははしたないとされる。しかしサンタル女性は前掲したいくつかの写真でも明らかなように短めに着る。これはサンタル女性が農作業などの労働に従事するため、行動の邪魔にならないようにという理由によるのだろう。

日本の和服の場合も、外出着や普段着は短めに、しかし紋付きや留め袖など正装の場合は長めに着る。スカートの長さ、和服の長さなど、足元をどの程度、隠さなければならないのか。ここに、「女性の素足を隠す・足元を見せない」という多くの文化に共通する規範をかいま見ることができる。下衣の長さは活動を規制するものであるが、それはまた、女性の社会的地位を示すといえる。サンタル女性が短めに着るのには、合理性があるし実際的であるが、彼女達の社会的地位を低くする要素となっていることも見逃せないのではないだろうか。

5）ベンガル民族からの応用

ここで、もう少し「サンタル女性の着方2」について検討してみよう。写真2の女性たちが着ているスカートの布は、色合いと模様から判断して、ベンガル男性の民族衣装サルーン（あるいはルンギともいう腰布）である。サンタル女性は、ベンガルの男性のサルーンをスカートとして利用している。これを「伝統的（traditional）」な民族衣装と呼ぶべきか。

サンタル民族は、未開民族ともされるように、自然に密着して生活する人々である。開発が進む中、ベンガル人のもとで雇用されるようになってきた。雇用者が被雇用者に物品を貸与するという行動は通常みられることである。サンタル民族は、雇用者であるベンガル人から何らかの形で衣類の貸与を受け、自分たちなりの着方を工夫していったのではないかという推測ができる。実際、「ヒンドゥー女性の着方」は、「手」の部分を折り畳んで左肩に安全ピンで留めるのだが、活動中にずり落ちてくる煩わしさがある。「手」を前へもってきてウエストに挟み込むこともできるが、農作業のような肉体労働に従事するサンタル女性の生活行動には適さない。

ちなみに、筆者の観察の範囲では、サンタル民族の男性がサルーンを着たのを見たことはない。

以上のように、サンタル女性のサリーの着方は、2通りあり、いずれも「伝統的（traditional）」と人々は言うが、どちらかと言えば、着方そのものは「サンタル女性の着方1」が古い着方と共通点が多く、「サンタル女性の着方2」はベンガル人から貸与された（おそらく）古着のリサイクル的着方だという仮説をたてることができるのではないか。

3.「ヒンドゥー女性の着方」をするサンタル女性

1）サンタル女性の一つ目の例

サンタル民族の女性のサリーの着方は、前述したようにヒンドゥー女性の着方とは異なる。しかし、サンタル民族の女性も、「ヒンドゥー女性の着方」をすることがある。

写真5は、サービスセンターの多目的教育センター[12]で教師をしているサンタル女性である。彼女は、普段、自宅にいる際は、ナイティと呼ばれる、簡単に言えばハワイのムームーに似た長いワンピースやパンジャビドレス[13]を着ている。しかし、保育園に出勤するときはサリーを着る。そしてその着方は「ヒンドゥー女性の着方」である。彼女は、若く（この時は24歳）未婚なのでパンジャビドレスを着ても構わない。しかし、この1－2年サリーを着るようになった。

西ベンガル州の女性たちは既婚・未婚を問わず、ある程度の年齢になればサリーを着るようになる[14][15]。

写真5　教師をしているサンタル女性
2006年3月5日筆者撮影
バンクラ県M村

彼女の保育園の園長的存在であるという立場、24歳という年齢を考慮した場合、パンジャビよりサリーを着た方が貫録が付いてみえるという効果もあるので、サリーに変えたのだろうとみていた。ただ、彼女ばかりではなく、他の多目的教育センターのサンタル女性教師たちも、センターへ仕事に来るときには、「ヒンドゥー女性の着方」で来る。すなわち、サンタル女性は、就労する際のような改まった場の場合、「ヒンドゥー女性の着方」がふさわしいと考えていると思われる。

2）サンタル女性の二つ目の例

もう一つの例を見よう。写真6は、M村の娘[16]が結婚のために夫の村へ行く[17]という時、自宅の前で撮影したものである。夫の村へ行くに当たり、ネックレス、腕輪などの装飾品を身に付け結婚式にふさわしく着飾っている。サリーもこの日のために買ったのだろうか美しいものを着ている。結婚にふさわしい服装とはもちろん

写真6　実家を出るサンタルの花嫁
筆者撮影、2006年3月5日、
バンクラ県M村

正装である。「ヒンドゥー女性の着方」がサンタル女性の間で、「正装」として意識されていることが理解できるものである。

まとめ

以上みてきたように、サンタル民族の女性のサリーの着方は、変化してきている。そして、その変化とは、「ヒンドゥー女性の着方」への変化である。これは、すなわちヒンドゥー化の証左とみることができるものである。

女性たちは、日常生活の着方「普段着（カジュアルな着方）」と、仕事へ行くあるいは外出するような際の着方「外出着（フォーマルな着方）」を着分けている。普段の生活の中では、自分たちの着方をする。しかし、仕事（賃労働ではなく月給を得る就労）を持っている女性が仕事へ出るような場合は「ヒンドゥー女性の着方」をする。また、結婚のようなハレの場では、「ヒンドゥー女性の着方」となる。サンタル女性にとり、「ヒンドゥー女性の着方」が「フォーマルな着方（外出着）」そして正装として位置づけられている。

重要なのは、ヒンドゥー化とは、単にサリーの着方の変化だけではなく、意識の変化とつながっていることである。すなわち上位の社会の着方をフォーマルな着方とし、自分たちの着方を普段着の着方とするというように、着方の間に上位・下位の位置づけがなされている点である。これは、上昇志向として説明される。

自分たちの文化を下位と位置づけるならば、次にはその文化を破棄するように力が働くだろう。そして民族のアイデンティティーは失われる方向へ進む。

サンタル民族が、サリーの着方のみならず独自の伝統的な習慣を失いつつある状況は、他の多くの研究者が報告している（戸川 2003; Mukhopadhyay 2002; Ghurye1963）。異なった文化をもつ社会がお互いに影響し合うこと、それは避けられないことであろう。文化は不変のものではない。サンタル民族が、ヒンドゥー社会やインド社会から隔絶して生活を続けていくことはもはやできない。近代化から逃れようと森の奥深くに逃げることは現実的ではない。彼らが、ヒンドゥー社会やインド社会の影響から免れることができないことは明らかである。

民族の女性に関する研究では、民族の女性の社会的地位は高かったという報告が多い（Maharatna 2005:29; Fernandes 2006:113; Mukhopadhyay 2002:137）。それは、サンタル女性についても同様といえる。ヒンドゥー女性やベンガル女性の状況は民族の女性に比較して、決して良好なものではない（千葉 2008）。このことは、ベンガル人自身が認めている（2008年9月の聞き取り）。ヒンドゥー化は、女性の社会進出、市場への参入をますます

規制するだろう。ヒンドゥー化によって、サンタル女性は、得るものより失うものの方が多いだろう。

では、彼らはその影響に対してどのように対処しようとしているのか。変化の力は、2つの動きを作り出す。一方は推進方向へ動き、他方は反対派となる。ヒンドゥー文化の影響を受けつつもヒンドゥー化することに抵抗を示し、自らのアイデンティティーを主張し、民族固有の文化を大切にしようとする動きもある（西村祐子 1989:152）。教育を受けたり啓発されたサンタル民族は、民族の社会的政治的同一性の保存を求めて、組織を作ったりする。サンタル民族の女性が民族としてのアイデンティティーを守る方向で生きて行くのか、ヒンドゥー社会の規範を取り込んでいくのか、もし取り込むとすれば、何をどのように取り込むのか。彼女たちは、自らのアイデンティティーを守るために何を選択するのだろうか。これは大きな課題である。

本稿は、サンタル女性のサリーの着方の変化を基に、サンタル民族のヒンドゥー化を論じた。サンタル民族が自分たちの文化を放棄し、ますます「開発」を進める方向を選択するのか、民族としてのアイデンティティーを守る方向を選択するのか、あるいは「開発」を求めながらも、自らの伝統文化を保持しようとするならば具体的にどのように動くのか。

今後は、彼女達が自分たちの生活の変化をどのように捉え、どのようにヒンドゥー化を受けとめているのか、彼女達の心象に迫ることで、開発が少数民族の生活にもたらす影響についての研究につなげたい。

本研究は、科学研究費・平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号　18530435）によるものの一部である。

本稿作成にあたり、インド国西ベンガル州で活動している開発NGO・Development Research Communication and Services Centre のスタッフであるチャタジー公子氏、ドルガシャンカール・パルダン氏、ドルガダス・トゥドゥ氏に調査対象の村々やサンタル民族に関する資料収集・提供の協力を得たことをここに深く感謝する。

（受理日：平成20年11月11日）

注

1) 何をもって文化を「上位」と「下位」に分類するのかは難しい。本稿では、「人口・支配力・経済力」を基準として広義の概念で用いる。

2)「ヒンドゥー社会」を定義することは極めて困難で、本稿においては「カースト制の枠組みにある社会」という広義な概念で捉えるものとする。更に議論を進めたい人には、中根千枝（2002 :213-244）を勧めたい。

3) インドの社会で起こっている社会現象の変化の一つに、「ヒンドゥー化」とともに「サンスクリット化（Sanskritization）」がある。これは、「低位カーストの層や少数民族が、高位カーストの生活様式や聖典を規範として見習うように努める過程」とされており（Maharatna 2005:5; 小谷汪之 1989:6）、ヒンドゥー化と共通する部分もあるが、本稿ではその性格上、ヒンドゥー化のみに焦点を当てて論じるものとする。

4) サンタル民族については、千葉たか子（2007）を参照されたい。

5) 人類学的に区別される「ベンガル人」という人種あるいは民族がいるわけではない。本稿では、西ベンガル州に住んでいるヒンドゥー人口の総称として用いている。

6) 通訳は、日本人とベンガル人およびサンタル民族の特定の個人に依頼している。毎回異なる人に依頼するのではないので、通訳業務に関しては一貫性があると考えている。

7) これと同様の事実を西村（1989）も報告している。

8) サリーの着方については、千葉たか子（2008）を参照されたい。

9) 女性たちの着るものに限って言えば、西ベンガル州は「保守的である」という評価は当たっているかも知れない。若い女性が洋装しているのを見かけるのは、最近のことでそれも州都コルカタのみで、農村の場合は外国人の例外を除けば女性の洋装を見かけることはない。

10) ボルプルは町の名前だが、ボルプルにある大学（University）の名前をSantikiketanというので一般にSantikiketanとも呼ばれる。ベンガルが誇るノーベル文学賞を受賞したR. タゴールで有名な大学である。日本との交流も深く、かつて岡倉天心もここで学んだ。多くの学部を抱え、外国からの留学生も多い。

11) この慣習は、江戸時代の「落飾」と共通している。

12) インド国西ベンガル州にあるサンタル民族の村で農村開発を推進する開発NGOである。正式名称は、Development Research Communication and Services Centreで通常、「サービスセンター」と呼んでいる。このNGOが設置した、多目的教育センター（Multi Purpose Education Centre）である。

13) インド及び中東などの女性たちが良く着る、ワンピース（カミューズ）・ズボン（サルワール）・スカーフ（ドウパタ）の3点セットの民族衣装。西ベンガル州では、未婚女性がパンジャビで既婚女性がサリーを着るのが一般的である。

14) インド女性のサリーへの強い思いは、辛島貴子（1989:77-80）に生き生きと描写されている。

15) 日本では、振り袖は未婚女性の着る物だが、ある程度の年齢になれば着るのを控える。年齢による服装規

範はどこの社会にもある。

[16] この花嫁は、見たところ、ようやく 14 － 15 歳というところだろう。新郎も 18 歳程度である。インドでは、結婚の法定年齢は、女は 18 歳、男は 21 歳となっているが、農村では今も結婚は早い。

[17] サンタル民族は、通常、民族内結婚 (Endogamy)、氏族外結婚 (Clan Exogamy)、村外結婚 (Village Exogamy) である。したがって、村から出て行くのはいつも新婦である。

引用文献

中根千枝：社会人類学 アジア諸社会の考察、169、講談社、2002

参考資料

辛島貴子：家庭と生活、佐藤宏他編：もっと知りたい インドII、59-85、弘文堂、1989

小谷汪之：インドを見る目「心の旅路」にむけて、佐藤宏他編：もっと知りたい インドI、1 － 11、弘文堂、1989

千葉たか子：マドプール村の開発－インド国西ベンガル州の少数民族の村の変化－、青森県立保健大学研究雑誌、第 8 巻第 2 号、225-235、2007

：サリーを買うのは誰か －インドの少数民族の女性の購入決定権へのアクセス－、青森県立保健大学雑誌、第 9 巻第 1 号、9-20、2008

戸川昌彦：ヒンドゥー女神と村落社会　インド・ベンガル地方の宗教民族誌、風響社、2003

中根千枝：社会人類学 アジア諸社会の考察、講談社、2002

西岡直樹：インドの樹、ベンガルの大地、講談社、1998

西村祐子：生活と宗教、佐藤宏他編：もっと知りたい インドII、弘文堂、145-173、1989

Bose, N. :The Santhals, in Bose, N. The Santhals,4-5,2002

Chacko,P.M. :Tribal Communities and Social Change, 2005

Fernandes, W. :Development-induced Displacement and Tribal Women, Rath, G. C.(ed.):Tribal Development in India, p.112-130,2006

Ghurye, G.S.:Scheduled Tribes of India, 1963

Janah, J.S.:The Tribals of India through the lens of Sunil Janah, 2003

Kumar, J.L. (ed.):Encyclopeadia of South-Asian Tribes,3114-3130,2000

Maharatna, A.: Demographic Perspectives on India' s Tribes, 2005

Mukhopadhyay, L.: Tribal Women in Development, 2002

Singh, K.S. :People of India, National Series Volume III, The Scheduled Tribes, 1043, 1994

Verma, R.C.:Indian Tribes/ Through the Ages, 1990

インターネット

「インド雑貨屋 SUNDAR」http://sundar.jp/（2008.01.22）

「サンタルの村にて」中村仁

http://homepage2.nifty.com/naada/santal.html（2008.01.10）